

北海道和種馬を活用した観光の可能性について

～トレッキングツアーを視点として～

About the possibility of tourism utilizing Hokkaido native horse

～The point of view as a trekking tour ～

唐箕 環*¹

TAMAKI, Toumi

本研究は、北海道開拓期の社会基盤整備に貢献してきた在来馬の和種馬（通称：道産子）を活用した観光活動の一つである、ホーストレッキングの課題とその解決策を考察したものである。この課題の主なものとしては、「観光アクティビティとしての意識、広報、仕組みの欠如」「スポーツ型利用者マーケットの限界の存在」「観光活動に組み込む時、観光分野のインタープリターの存在の皆無」を挙げることができる。これらの解決策として、産学官の協働を指摘し、特に学生の活用を提案した。また乗馬観光は、リピーターの期待できない鑑賞型自然資源を体験型自然資源に変質させ、リピーターを望める手立てとして有効である点を吟味した。

キーワード：北海道和種馬、ホーストレッキング、地域資源、産学官の協働

1. はじめに

近年観光地の集客の方法として、体験型観光が進められている。こうした背景には、鑑賞型観光が、リピーター観光客の創出に難しい点が挙げられる。他方、体験型観光は、自然景観や歴史的町並みの付加価値を生じさせ、時にはビジネスベースの体験型アクティビティを生み出すこともある。こうした研究は、B.J. パインと J.H.ギルモア（2000）に詳しい。パインらの研究に沿えば、自然鑑賞の観光は、いかに素晴らしくとも、いつかはコモディティ化が進むと指摘している。コモディティ化は、価値を減少させ遂には日常化されて観光地から、風景へと変質する。パインらは、体験の重要性を指摘している。こうした点を踏まえれば、北海道観光の観光資源は大方自然鑑賞型で、これらの質的転換は、急務であると言えよう。北海道自然体験型観光のアクティビティの一環として、北海道和種馬によるホーストレッキングの実現性と阻害要因などの考察をする。実現性では、既存の組織の利活用で可能になる実態を明らかにすることを試みた。障害要因では、クラブ的 NPO 組織から地域文化を支える NPO 組織、さらには、ビジネスとして成立する阻害要因について明らかにする。併せて、北海道和種馬を、ビジネスベースで保存する可能性について考察を加える。

2. 研究の方法

本研究は、先行研究での馬文化の比較について文献を基に、課題と問題点について整理した。また具体的内容として、利用者サイドのツアー体験者と運営サイドの牧場経営者からの課題と問題点

*¹ （有）環エディットオフィス

についての聞き取り調査を行った。またホーストレッキングの先進地域での現状を把握するために、大都市圏に近隣でマーケットが期待される恵庭市にある北海道和種馬保存協会、ホースガーデンMURANAKA、そして北広島市にあるホース・フィールド・ワッツの3施設への聞き取り調査を実施した¹⁾。

2. 北海道の馬文化の歴史的背景

(1) 第一次世界大戦前中の軍事・農事的利用

日本における近代の馬文化の起こりは明治期以降、国による、軍馬としての資質向上に向けた去勢の品種改良が推進され、優良馬を外国から種馬として導入したことにある²⁾。小型馬と中型馬が特徴の日本在来馬の牡は去勢され、西洋の大型馬が種牡として使用された。そのため在来馬は急速に減少し、北海道和種のルーツである南部馬も絶滅の一因となった。第2次大戦後は軍馬の需要が皆無となり、また農耕用や運搬用としても飼養されていたが1960年代頃までに自動車社会の到来と共に激減した³⁾。戦後を境に、人間と密接な関わりが保たれていた馬の文化が廃れたといえる。

(2) 戦後におけるレジャー産業での利用

第2次世界大戦後は競走馬の需要の高まりと共に軽種馬の生産が定着し、拡大していった。北海道では明治期以降、国の馬匹改良に伴い、新冠御料牧場や日高種馬牧場が整備された。第2次大戦後は全国同様、北海道でも競走馬の需要が高まり、日高管内では大規模化が困難な土地条件の制約や転作制度開始などの影響も受け、軽種馬生産への転換と特化が進み、国内最大の軽種馬産地として定着していった⁴⁾。

一方、開拓期に農耕馬の力比べとして楽しまれ、フランスやベルギー種などの洋種馬に最高1トンの鉄櫓を引かせて競うレースのばんえい競馬が、公営競馬として1947年に旭川市と岩見沢市で、1949年に帯広市で、1953年に北見市で開始された⁵⁾。世界に例がない北海道独自のばんえい競馬は戦後のレジャーとして親しまれたがその後、売上高の減少に伴い、2006年に旭川市、北見市、岩見沢市から撤退し、現在は帯広市だけで開催されている。

1990年前後には千歳市のノーザンホースパークや日高ケンタッキーファームなどで引き馬の乗馬体験が導入され、馬による観光アクティビティが開始された。またそれまで乗馬クラブで会員向けのプログラムであったトレッキングツアーが観光活動に有効であると期待され、牧場や観光施設で取り組まれるようになった。馬の種類によってトレッキングルートを設定し、施設独自の特色を打ち出していた。種類は洋種馬か和種馬、またはその半血種であるが、洋種馬限定、和種馬限定、または両品種混在の牧場がある。現在、洋種馬と和種馬の両方を活用した事業者は78事業者あり、和種馬のみを活用した事業者は11事業者ある⁶⁾。

(3) 北海道開拓を支えた北海道和種馬の保存活動

現在日本の在来馬は8種類あり、体高によって区別されている。約130cmの中型馬である北海道和種(北海道)、木曾馬(木曾地方)、御崎馬(宮崎県都井岬)の3種、体高約115cmの小型馬である野間馬(愛媛県今治市)、トカラ馬(鹿児島県トカラ列島)、宮古馬(沖縄県宮古島)、与那国馬(沖縄県与那国島)の4種、中間型の対州馬(長崎県対馬)の1種で、これらの内8割が北海道和種である⁷⁾。

戦前・戦後を通して北海道開拓と農業活動に活用されてきた北海道和種馬は、1600年代に東北地方の南部馬が導入されて以降、在来馬として物資運搬などに使役されてきた。最も需要が高まった

のは明治期で、原生林の抜根（図1）、また約200 kgまでの荷物を積むことができる駄載能力があるため生活物資や山林地帯の送電線敷設などの資材運搬に使役された。農業分野でも活躍をし、和種馬とばんえい競馬で使役されていたペルシュロン種などの洋種馬の掛け合わせを農耕馬として使役していた（図2）。北海道和種馬は明治時代には約9万頭いたとされているが、1960年代の自動車社会の進行と共に需要が減少し、現在乗用馬として約1,148頭が飼育されている。気質は温和で、成育時に厳しい調教を行うことでさらに扱いやすくなる⁸⁾。側体歩の特徴があり、体高約130 cmのため騎乗が容易で、洋種馬よりも揺れが少なく安定性があるため、洋種馬専門の乗馬クラブで活動していた利用客が和種馬に乗りかえるという事例も散見される。その安定性を生かして灌木地帯への進入が可能で、洋種馬とは異なる観光アクティビティが存在している。

現在和種馬を飼育している牧場などの事業者は和種馬の保存活動にも力を入れている。北海道に7支部ある北海道和種馬保存協会に所属し、観光活動に利用することで種の保存を図ることが期待できることから種の保存の他、トレッキングツアーを開催して観光客の受け入れ活動を行っている。



図1.「抜根機ニテ抜根ノ景」

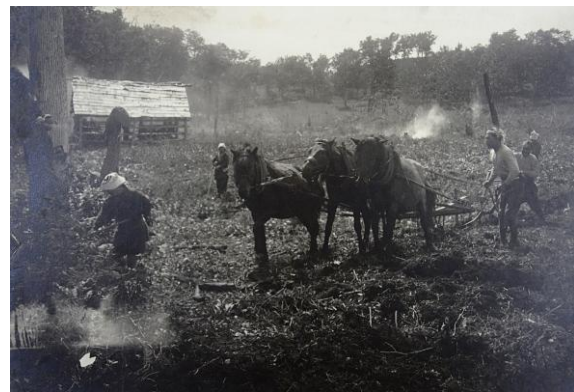


図2.「馬墾ノ景」

(共に北海道大学附属図書館北方資料室所蔵「北海道古写真」より複写)

3. 北海道の乗馬観光の現状について

(1) 来道観光客の主要目的と乗馬体験の経年変化

来道観光客の観光目的から乗馬体験の位置について調査し、今後の展開について考察を試みた。来道動態調査結果⁹⁾から、平成14年度、19年度、23年度で乗馬・ラフティングなどのアウトドアは下位にあり、魅力的な内容としては捉えられていないことがうかがわれる（図4）。こうした背景には幾つかの点が考えられるが主要な要因の一つとして、北海道観光がステレオタイプの観光地として広報され、それで集客が可能であった時代の延長上に存在し、没個性化の観光地として存在している点が挙げられよう。こうした観光資源の中で、乗馬観光の未整備な点から生じる認知度の低さが指摘される。現在実施されている乗馬体験の内容は多様で、引き馬も含まれており、難易度も区分が明確でない。そのなかでホーストレッキングに対する認知度が明確でない。可能年齢、運動量、技術的問題などが充分に広報、認知されず、ラフティングなどのアウトドアと同等に認識され、集客力はさらに低くなっていると推測される。優位にある北海道観光の目的は、自然観賞や温泉・保養、都市見物などステレオタイプの観光資源であると言えよう。しかしこうした観光資源が、グローバル社会の到来やLCCを代表とする安価な移動手段によって競争力を失いつつあるのも否定できない側面である。こうした中で、北海道文化に根差した、ホーストレッキングとこれら

の目的と結び付けて体験させる仕組みづくりが重要な課題として挙げられよう。

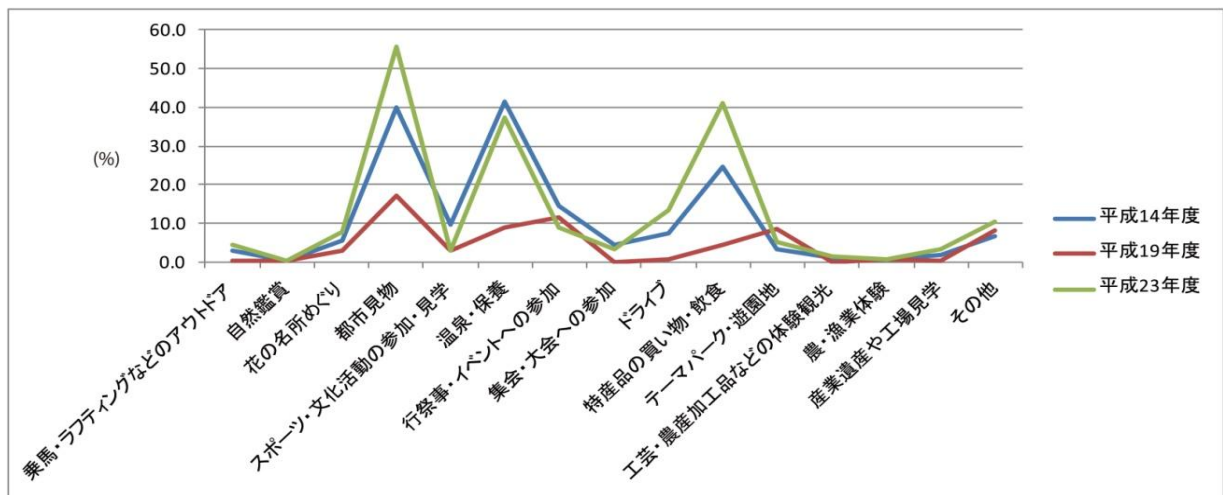


図4. 来道観光客動態調査における乗馬・ラフティングの位置づけ
(北海道経済部観光のくにづくり推進局 来道観光客動態調査を資料に筆者作成)

(2) ホーストレッキング・ビジネスの現状と課題

①ホーストレッキング・ビジネスの現状

1997年に牧場関係者による北海道うまの道ネットワーク協会が結成され、各地の牧場施設を結ぶ「うまの駅」構想が発想された。道内61カ所の施設を掲載したガイドブックを北海道の補助金で制作するなどし、連携の可能性について模索が試みられたが、金額面や地理的側面において実現不可能という結論が出た。当初は北海道の補助金で運営し、補助が打ち切られた後も5年間は運営していたが、その後、乗馬クラブなども半減し、協会は解散している。それ以降は、牧場単体で宣伝や受け入れを行うのみであったが、後継として和種馬協会道央支部の会員である菅原日登美氏が中心となり同会内で2012年「うまの駅」部門を立ち上げた。しかしスタッフの不足などの課題があり、表立っての活動は行われていない。協会が活発化しなかった理由を北海道和種馬保存協会(恵庭市)、ホースガーデンMURANAKA(恵庭市)、ホース・フィールド・ワッツ(北広島市)に取材した結果、以下のことが明らかになった。

第一に費用の問題が挙げられる。日本の場合は1時間10,000円が相場だが、欧米と比較すると倍以上の値段設定である。外国同様、ホースガーデンMURANAKAやホース・フィールド・ワッツは放牧場もあり、すべて自前で出来るため他施設と比較すると低価格で提供を行うことが可能である。宿泊が伴うトレッキングツアーになると高額になり、その結果、利用客は1時間から半日程度が多数である。ファームインや牧草地を借りられるなどの連携が取られている欧米などは3泊で5~6万円が相場であるが、日本の場合は牧場施設とファームインが少なく、利用できる宿泊所が限られており、欧米の2~3倍の費用がかかるといえる。

第二にトレッキングルートの整備があげられる。馬の文化が維持され、牧場が多い欧米などではルートが整備されているが、日本は未整備で、自前の放牧場や山道、一部自動車道で行われているだけである。フットパスの活用も指摘されているが、糞の処理やその費用の問題があげられている。

②和種馬を活用したトレッキング事業者の現状と課題

和種馬単体で運営している11事業者の内、タイプの異なる和種馬保存協会道央支部、ホースガ

ーデンMURANAKA、ホース・フィールド・ワッツの3者に聞き取り調査を行った(表3)

表3. ホーストレッキング事業者のケーススタディ

ホーストレッキング事業者		A. 北海道和種馬保存協会道央支部	B. ホースガーデン MURANAKA	C. ホースフィールド ワッツ
運営者	① 年代	60代(理事)	60代	60代
	② 事業開始年	2013年	1999年	1999年
営業形態	③ 立地	恵庭市中央前山牧場内	恵庭市牧場	北広島市輪厚
	④ 牧場主の職業	牧場主、会社員等々々	元会社員(親は農業)	元会社員(親は農業)
	⑤ 労働形態	会員組織	経営者のみ	経営者のみ
	⑥ 後継者の有無	理事組織	無	無
	⑦ 他施設連携	有	無	有
体験メニュー	⑧ 基本コース	牧場周辺・2時間	牧場周辺・1時間単位	牧場周辺・1時間単位
	⑨ 種類	一定	一定	多数
	⑩ 料金	入会金 10,000 円、会費 1 回 1,000 円、一般 2,000 円	1 時間 4,000 円～	1 時間 5,000 円～
	⑪ 馬の世話	有	無	有
	⑫ 時期	4月～10月	通年	通年
ターゲット	⑬ 主要利用客	恵庭、札幌など	主に本州客	道内、本州客
地域文化案内	⑭ 取り組み方	無。検討中	無	無
障害者受入れ		検討中	予定なし	児童を中心に受け入れ
宣伝方法		ホームページ有。会員のみ 1 年に 1 度	ホームページ無、インターネット媒体の集合広告	ホームページ有 上記以外特になし
今後の展望		当面は会員向けに充実	現状維持	子どもの教育に応用

【和種馬保存協会道央支部】

1978 年に馬主達が設立し、現在 7 支部がある。恵庭に拠点がある道央支部は会員が用地を提供して運営している。馬場内と敷地内の原野や支笏湖周辺までが活動範囲である。活動資金は北海道開拓の村の馬車運行(図3)、北海道神宮の流鏝馬神事(図4)、各自治体のイベント業務などの委託業務、および会員の入会金と月会費である。第一の目的は和種馬の保存にあり、和種馬の認知度を高めるため一般向けに 2012 年に会員組織の愛好者部門を設け、乗馬体験やホーストレッキングを行っている。会員は現在 50 名在籍している。その内 10 名ほどの専任スタッフが馬や施設の管理、乗馬指導などを行っている。参加する際は一般参加者を除き、馬を牧場から連れてきて馬の手入れ、鞍付けなどすべて行うことを条件にしている。組織の運営において会員の技術向上も含めた人材育成、運営の関与の仕方が課題として挙げられている。特に新規入会者は乗馬体験で満足し、運営への積極的な関与が見られない傾向が散見され、会員の積極的関与が望まれている。今後一般向けにもホーストレッキング活動を積極的に行っていく方針だが、愛好部門が設立されて間もないことも



図3. 和種馬協会の事業・開拓の村の馬車運行(筆者撮影)と北海道神宮の流鏝馬神事(協会提供)

あり、通年行えるよう一般募集していく体制作りが期待されている。

【ホースガーデンMURANAKA】

恵庭市にある牧場主の村中和美氏（60）が経営している。会社員だったがホーストレッキング需要が高まった 20 年前に退職し、父親が経営していた牧場を継いだ。和種馬の純血種保存にも努めている。頭数は 15 頭。以前はスタッフ 1 人と、父親の 3 人で営業していたが、現在は村中氏 1 人で飼育管理、利用客の対応まで行っている。利用客の要望に応じて他のメニューも組んでいるが、一人体制のため多岐に渡ったコースの提供ができない点から、道内の顧客よりも本州客の単発利用が多い。コースは自分の牧場のほか、隣接して河川敷、恵庭岳も望める恵まれた環境にある。料金を他施設と比較すると低価格である。新千歳空港にも近い立地を生かして本州の観光客の集客に重点を置いている。他施設との連携よりも単体で行うことに専念している。ガイドについてはスポーツアクティビティとしての位置づけで、自然や歴史文化の案内については今後の課題として挙げられる。



図4. ホースガーデンMURANAKAの村中氏、トレッキングコース
(筆者撮影および筆者騎乗中を村中氏が撮影)

【ホース・フィールド・ワッツ】

北広島市にある馬場稔氏（60）が経営している。会社員だったが 1990 年代初頭に道産子の飼養を始め、ホーストレッキングの運営を開始。北海道和種馬協会道央支部に所属しており、スタッフは必要に応じて支部会員に応援を要請している。料金は 1 時間 5,000 円である。コースは多岐に渡っており、利用客の要望に応じて組み立てている。和種馬の保存にも努めており、他人の馬を預かって飼育している。牧場内でイベント馬の貸与やイベントへの参加など他施設との連携や交流も行っている。



図6. ホース・フィールド・ワッツの馬場氏とトレッキングコース
(筆者騎乗中をホース・フィールド・ワッツが撮影)

またアニマルセラピー活動にも力を入れており、北広島や恵庭の小学校の課外授業として不定期で知的障害者の受け入れを行っている。参加が2回目以降になると自ら馬の世話を積極的に行うようになるなど、一定の成果を上げており、今後も取り組みを続けていく予定である。

③ケーススタディのまとめ

調査した3施設はスポーツアクティビティとしてのガイドに重点を置いており、北海道の歴史や自然、文化についての案内はほとんどなされていないことが明らかになった。北海道独自の自然や歴史文化を案内するうえで、ホーストレッキングは有効な観光アクティビティといえよう。これらの歴史や自然、文化に対する案内も行える人材を育成することで今後、ホーストレッキングの活動が広がるのが期待される。しかし後継者がいないため、現状の運営を維持するので精一杯で、これ以上の活動は限界と見受けられた。今後、外部で全般的な案内のできるインストラクターを養成していくことも今後の課題としてあげられよう。また、近年盛んな大学生のインターンシップとの連携に視野を広げ、観光関係の教育機関との協働により無給観光ガイドの確保と新たな後継者づくりを目指すことも考えられよう。

④障害者受け入れの可能性と高齢化社会の役割としての展望

和種馬の保存を念頭に置いた場合、障害者教育の一環として取り入れることも行われている。近年動物療法効果が認められており、馬に直接に触れたり、世話などを通して療養、バランス感覚の育成、協調動作の学習などの身体的効果が認められている¹⁰⁾。前述したホース・フィールド・ワッツでは北広島市内の小学校の障害児童を受け入れており、利用するごとにその効果が認められているという。また、高齢化社会を迎え、様々な障害の予防医学としても期待され今後の発展性の一つとして挙げられよう。

3. 地域資源の活用と整備課題

①恵庭市および北広島市の事例

本論で調査した和種馬保存協会道央支部、ホースガーデンMURANAKA、ホース・フィールド・ワッツは恵庭市と北広島市にあり、2市の地域資源についてまとめた。2市には農場や牧場、農家レストランなどが点在しており、それらをつなぐ既存のフットパスコースが5つあることから、トレッキングルートとの併用を検討することができる。さらにフットパスルートとの併用も行いながら、和種馬は1日約15km移動できるので、広範囲なルートを組むことも可能である。3施設はスポーツアクティビティとしてのガイドは行っているが、自然資源や農業資源、歴史資源については利用客への案内に乏しい。Aゾーンは支笏湖に続くルートで自然体験の提供ができる。Bゾーンは農業資源が集中しており、農業体験や農村景観の提供ができる。Cゾーンは自然及び歴史資源が集中している。和種馬保存協会道央支部ではこれらの地域資源を活用して活動することも今後の視野に入れている。この点に産学官の協働意識が必要で、地域の高校生のクラブ活動や地域学習の機会をとらえて利活用を促進する必要もあろう。地域教育の魅力づくりにも寄与でき、地域産業おこしにも寄与できる点は、単なる経済活性化より将来性に置いて、考えるべき点と認識されよう。また現存するフットパスルートを併用した中で「人とうまの駅」を設置することも魅力ある地域づくりのテーマとして挙げられる。

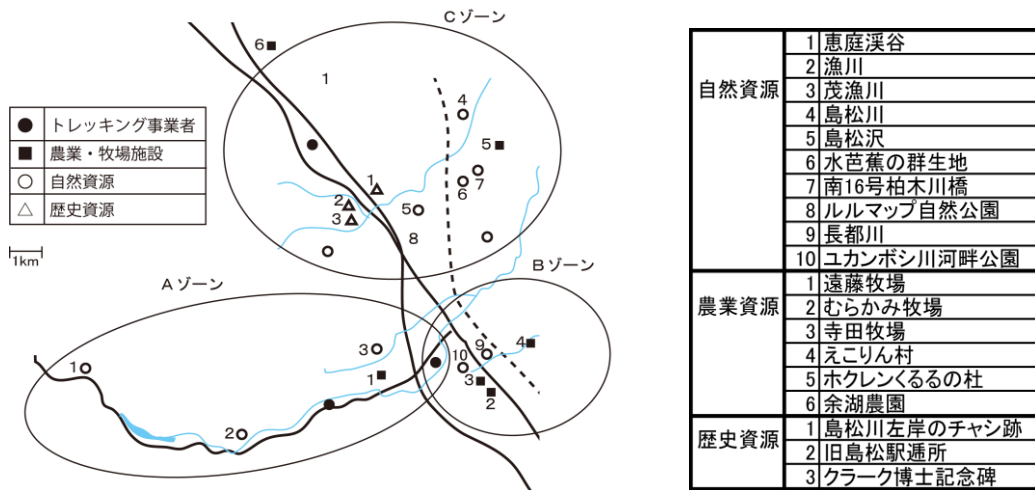


図7. 恵庭と北広島の地域資源とのリンク

5. まとめ

本稿では、観光活動として位置づけられてなく、乗馬愛好家を中心としたスポーツの一つとして利活用されている和種馬について、観光アクティビティとのリンクについて考察をした。北海道開拓の歴史の中で、農耕馬は不可欠な存在であった。時計台や北海道庁など都市の歴史的遺産は、観光資源となって保存されているが、農村部の歴史的遺産は細々と文化遺産と言った概念によって保存されている。こうした農耕馬の代表的な和種馬により乗馬観光は、北海道の観光資源とリンクすることによって、1度だけで十分だと言った鑑賞型自然から多様な関わり方を生み出す体験型自然へと変容させ、リピーターの確保に寄与できることが推測されよう。以下その課題と解決の方策を具体的に述べ、まとめに代えさせていただきたい。

【課題】

- ① 観光アクティビティとしての意識、広報、仕組みの欠如。
- ② スポーツ型利用者マーケットの限界の存在。
- ③ 観光活動に組み込む時、観光分野のインタープリターの存在の皆無。
- ④ 広域移動が可能であるが、受け皿の施設の不足。
- ⑤ フットパスの活用による相互補完的有効利用のルールづくり。

が挙げられよう。こうした問題に対し、

【解決の方策】

- ① 産学官の協働によって解決できる問題が多くある。特に学生のインタープリターの活用や高校のクラブへの呼びかけが、現場での補完的機能の充実につながることを指摘した。
- ② 利用者の広域領域の取り組みでは、こうした若者層への関心が将来的なユーザーへと移行する点を指摘した。
- ③ また予防医療の一つとして想定でき、高齢化社会において重要な産業となりうる点を示唆した。
- ④ 「馬の駅」構想に対し、「馬と人の駅」をフットパスとのリンクにより、実現可能であり相互に有効活用できる点を示唆した。

北海道の在来種である和種馬を活用することで北海道観光の振興に有効であることが明らかに

なった。インストラクターの養成など乗馬専門の人材を投入することで活動が活発になることも想定されよう。この点は今後の課題としたい。

○ 文中の写真は筆者撮影、または取材先の関係者より提供を受けたものである。

参考文献

- 1) 2013年5月～2013年8月調査実施
- 2) 「軽種馬生産を巡る情勢」北海道日高振興局馬産地対策室、平成23年6月
- 3) 小佐々学(2009)「日本の在来馬と西洋場 - 獣医療の進展と日仏獣医学交流史」日仏学術交流ルネッサンス報告論文集、日仏会館
- 4) 「軽種馬生産を巡る情勢」北海道日高振興局馬産地対策室、平成23年6月
- 5) 「蹄跡」(1983)北海道馬産史編集委員会
- 6) 北海道知事認定アウトドアガイド事業者一覧を参照
- 7) 小佐々学(2009)「日本の在来馬と西洋場 - 獣医療の進展と日仏獣医学交流史」日仏学術交流ルネッサンス報告論文集、日仏会館
- 8) 小佐々学(2009)「日本の在来馬と西洋場 - 獣医療の進展と日仏獣医学交流史」日仏学術交流ルネッサンス報告論文集、日仏会館
- 9) 北海道経済部観光のくにづくり推進局調査
- 10) 井原昌代(2012)「すべての障害を持つ人のための乗馬ガイド」障害者のための馬事普及協会

(2014年2月24日受理)